

大事な人を、二駅先に置いてきた

大岡俊彦版

登場人物

健 (30)
漫画家を目指している。
綾 (29)
健と同棲中。看護師。

父 (58)
健の父。饅頭屋。
母 (54)
健の母。

苺 (6)
苺の母。迷子。

○健のアパート、深夜

漫画のネーム（ラフ絵やセリフ）を描いている健（30）。しかし筆が進まず、鉛筆でコマをぐちゃぐちゃに。

封筒に入れられた原稿の束。すべて

「没」と赤書。

健 「……」

鉛筆でコマを黒く塗りつぶしてゆく。

○夜明け

○同、台所

小豆を煮てあんこを作っている健。

扉の鍵が開き、綾（29）が夜勤から帰って来る。

健 「おつかれ」

綾 「（靴を脱ぎながら）ごめん、夜中の急患がこんな時間までかかっちゃって。もう寝てたと思ってた」

健 「疲れには甘いものが効くよ。皮、ないけど」

綾 「助かるー。あんこだけで十分。（つまみ食いして）おいしい」

リビングに放置された黒く塗りつぶされた原稿に気づく綾。

気づかないふりをして、

綾 「……今日新人ナースがいてね。脈のとり方とかなくなってなくて、ドクターの導線とか遮っちゃって、散々。私もそんな子に教える年齢になっちゃったなあって」

健、出来上がったあんこを鍋から移す。

健 「綾。漫画家の嫁と、饅頭屋の嫁、どっちになりたい？」

綾 「……え、何、どうしたの。私はどっちでもいいよ。健がなりたい自分になればそれでいいんだから。私はずいてくし」

健 「若い子に教える歳なんだろ？ 大台

乗っちゃまう前に、俺と別れたほうがいいんじゃないの？」

綾 「何言ってるの？」

健 「(原稿を差し)見たろ。全然描けてねえ。ダメ出しされ続けてもう何年経つ。やっぱ俺才能ねえわ。こんな男といても綾は幸せになれねえよ。別れよう。俺、饅頭屋継ぐわ」

あんこをテーブルに置く。

健 「毎度毎度同じ味の、あんこ作ってる

ほうが喜ばれるんだから」

健、扉を開ける。

綾 「ちよつと、どこ行くのよ」

健 「先寝てて。頭冷やしてくる」

健、出てゆく。閉じられる扉。

綾 「……」

スマホからラインをいれる綾。

テーブルの上に放置された健のスマホが反応するだけ。

綾 「……なんなのよ」

あんこを指でとって舐める。

○公園、朝

サラリーマンたちが会社に向かう。
健は一人公園のベンチに寝転がる。

○回想（九年前）、同じ公園

封筒の原稿を小脇に、ベンチで絶望している健。あまりにもショックで、ベンチから崩れて地面に倒れてしまう。封筒から漫画原稿がバラバラと散る。

綾 「大丈夫ですか！」

走ってきた綾。

綾 「大丈夫ですか？ 救急車呼びましょ

うか？ あ、私これでも看護師なので、いや、まだ看護師の卵なんです、応急処置はできます！ 失礼します！ えつと……えつと……(手首の脈を取り)脈がない！

え？ あれ？ 生きてますよね？」

健 「……」

綾の腹が鳴る。

綾 「！」

走って向かいのコンビニへ。

× × ×

おにぎりとお茶をがつつく健。

健 「ありがとう。生き返った。一週間ろ

くに食べてなくて、電車賃もなくて出版社
から歩いて帰って来て……」

綾、熱心に原稿を読んでいる。

綾 「めっちゃ面白いじゃないですか！

これでも没なんて、プロって厳しい世界な
んですね！」

健 「……ありがとう。フルボッコにされ

たやつなんだけど、ちよつと元気出たわ。

あ、おにぎり代返すから。いや、原稿代出
るのいつかわからないけど、必ず返すから」

綾 「じゃあ、出世払いで利子付けます」

健 「(笑)」

綾、時計を見て立つ。

綾 「あ、そろそろ私出勤なので」

健 「……あ」

綾 「？」

健 「……えっと、あの……次の話、看護
婦ものなので、取材させてくれない？」

○手を繋いでデートする二人

健 「えっと、あのさ」

綾 「なに？」

健 「次の漫画、カップルが同棲する話な
んだけどさ」

綾 「いいよ。二人で住もうよ！ 取材に
なるよ！ お互い変な時間だし、ぴったり
よ！」

○(回想終わり)元の公園、昼過ぎ

ベンチから起きる健。

健 「……」

○実家の饅頭屋「きん」

物陰から覗く健。

父と母が接客中。

前に進めず、逃げてしまう。

○小さなデパートの屋上

苺（6）が必死で母親を捜している。

健 「……どうしたの？ お母さんとはぐれたの？」

苺 「（泣きそうになるのをこらえている）」

○同、迷子預り所

スタッフ「有難うございました。今からアナウンスします」

健、去ろうとすると、苺は健の袖を掴む。

健 「なに？」

苺 「お母さん迎えに来るまで一緒にいて」「……しようがねえな。どうせ暇だし」

横に座る。

苺 「（大喜び）ねえ！ お話して！」

健 「はあ？」

苺 「おはなし！」

健 「えつと……昔むかしあるところに、おじいさんとおばあさんが……」

苺 「知ってる」

健 「じゃあ継母にいじめられた……」

苺 「それも知ってる。知らない話がいい」

健 「……じゃあ、とっておきを。右手にドリルを埋め込まれた男が、左手に日本刀を埋め込まれた怪人と闘う」

苺 「なにそれ！」

健 「面白いか」

苺 「面白そう！」

健 「そりゃそうだろ。新人賞佳作受賞作

だぞ！」

苺 「他ののは？」

健 「ええ？ 怪獣の腹をかつさばいて生まれてきたヒーローは、その怪獣の能力を持っていて……」

苺 「(キャッキヤ笑う)」

健 「えと、じゃあ、忍者対キャバクラ嬢」

苺 「……(微妙な顔に)」

健 「あ、まだ子供には早いか。じゃあ、

ロボット対UFO」

苺 「……(微妙)」

健 「あれ？ じゃあ、巨大ロボット対ジ

ェット戦闘機」

苺 「前のと一緒」

健 「そうだよな。編集者にもそういうわれた。じゃあ、殺人ウイルス対ジャングルから来た殺人医者」

苺 「……？」

健 「くそう。じゃあ、じゃあ……」

苺 「あ、お母さん！」

迎えに来た母親。

二人、お礼をして去ってゆく。

健 「……(独り言)とっておきの、漫画家辞めて、彼女と別れて饅頭屋継ぐオッサンの話はどうだ？……」

○饅頭屋「きん」、夜

電気を消し、シャッターを閉める母。

健 「あれ？ ……親父は？」

母 「健。どうしたのよ。帰るんなら言ってくれたら」

健 「シャッター閉めるの、親父の仕事だろ」

母 「お父さん、もう何年も夜はお店出ないの」

健 「？」

母 「ずっと落ち込んでるのよ。あんたがあんなこと言ったから」

健 「そんな……そんなつもりで言ったわ

けじゃ」

そこへ、父が外出から包みを持って帰って来る。

父 「何をやっとするんだ」
健 「あれ？ 親父寝込んでるんじゃないの？」

父 「なんのことだ」

健、母を見る。母、とぼけたふり。

母 「お父さん、洋菓子入りの饅頭の研究の為に、夕方から洋菓子屋さんと勉強してるのよ」

健 「は？」

父 「お前が『毎日毎日同じもの作ってるなんてバカだ』って出てったのが効いてな。どうだ？」

包みを開けると、色々な饅頭が。

父 「(ひとつづつ指さす)カスタード、マロングラッセ、メレンゲ……」

健、ひとつ食べてみるが、微妙な表情。

健 「……微妙」

父 「ははは。まだまだなんだよ。でも面白いぞ。お前があんなこと言っただけ出たかなきや、今でも俺は毎日同じ小豆を煮てただろう」

健 「……」

父 「なんだよ」

健 「やるじゃん、親父」

母 「ねえ、晩御飯食べてく？ 漫画の新人賞からどうなったのよ？」

健 「あー、またゆっくり話すわ。今日は帰る。寄っただけ」

帰ろうとする。

母 「今度は綾さん連れてきなさいよ」

健 「……」

考えて、走り出す。

○深夜、病院の通用口

綾 「おつかれー」
と同僚と別れる。

健が立っているのに気づく。

綾 「……なによ」

健綾 「……大事な人を、二駅先に置いてきた」

綾 「は？ ……何言ってるの？」

健綾 「その人は駆け出しの看護婦で、脈を取るのが下手で、救える人を一人でも救いたいってスゲエ考え方の、尊敬出来る人なんだ」

綾 「……」

健綾 「それで、俺の漫画を面白いつて言ってくれて、俺の漫画に目をキラキラしてくれたのはじめての人で、俺の漫画の最初の読者になってくれる人なんだ。その人を饅頭屋の嫁にしちやいけない。だったら、俺とのはなかつたことにしなきゃ、つて思つた」

綾 「……」

健綾 「なんか俺、ワンパターンだったんだよ。だから煮詰まってたんだ。みえてなかつた」

健綾 「……そうじゃないかと思つてたけど」「じゃあ言つてくれよ。遠慮なく批評してくれ」

綾 「言ったら傷つくかと思つて」

健綾 「子供みたいに正直に読んでくれ。手加減なしだ」

綾 「……その人は怒つてると思うわよ。勝手に別れるとか言つて、仕事で疲れ際に言われてもね」

健綾 「……だから一緒に謝りにいってよ」

健綾 「それで、その人に新作の話をしたいんだけど、今から迎えに行くまでに感想を聞かせてよ。大事な人が、あの公園でまだ待ってるんだ。次の新作を目キラキラさせて待ってるんだ。迎えに行かなくちゃ」

綾 「ふうん。……いいわよ。で？」

健綾 「で、その人にいいたいんだけど」「何を」

健 「次の新作は、新婚さんの話だから、取材させてくれないかって」

綾 「……」

健 「？」

綾 「没！」

健 「ええええええええ」

綾 「ワンパターンすぎ！」

健 「そっか……そうだよな……」

綾 「健の所へ走って行って、腕を組む綾。」

綾 「とりあえず、次の新作の話を聞きましようか」

二人、歩き出す。

夜が明け始める。

○夜明けの公園

T 「大事な人を、二駅先に置いてきた」